

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く

132

石田三成敗走ルートをさぐる①

「関ヶ原合戦と伊吹山麓の伝承」

天下分け目の関ヶ原

この夏、司馬遼太郎原作の映画「関ヶ原」が公開されます。まだまだ熱く続く石田三成ブーム。三回に分けて、関ヶ原合戦直後の石田三成の敗走ルートをとどめてみたいと思います。今回のシリーズでは山麓の伝承をたどって、どんな思いで三成は伊吹山麓を駆け抜けたのか迫ってみます。(三成の敗走劇には諸説あります)

今回は、三成案内人として活躍されている田附清子氏(佐和山城研究会)



▲笹尾山三成陣跡

とともに、笹尾山三成陣跡(岐阜県関ヶ原町)から、田中吉政に捕縛されたとされる古橋(長浜市旧木之本町)までの推定ルートをたどってみることにします。

まず、関ヶ原合戦の経過から。ときは慶長五年(一六〇〇)九月五日。午前六時、東西両軍は布陣を終えたものの、盆地はいにくく濃霧に覆われて様子見を余儀なくされます。午前八時、東軍徳川方の井伊直政・松平忠吉隊が、宇喜多隊へ発砲して、戦端が開かれます。当初、西軍優勢で進むなか、午前一〇時には、徳川家康が南宮山北西山麓の桃配山から本陣を前進させたことで、少しずつ東軍が盛り返します。

午前一一時、三成は南宮山の毛利・吉川隊、松尾山の小早川隊にのろしで参戦要請するも動かず、戦場のど真ん中に陣取る島津隊にも参戦の気配がありません。正午、突然小早川隊が松尾山を下り、味方の大谷吉継隊めがけて攻撃を開始、これに、山麓の赤座、脇坂・小川・朽木隊が呼応。吉継は支えき

れず切腹。これを機に、午後一時、西軍小西行長、宇喜多秀家が戦線離脱。午後二時、石田軍の猛将島左近・舞兵庫・蒲生郷舎らが奮戦、次々に戦死するなかで、三成は磯野・塩野・渡辺の三名を伴って戦線を離脱します。午後三時、島津隊が敵中突破して戦場を脱出。午後四時に東軍の勝利となり、関ヶ原の戦いは収束しました。

誰もが、東西約一七万の大軍が対峙する戦いが、たった半日で終わるとは予想もしていなかったでしょう。再び戦乱が全国各地に飛び火し、チャンスをうかがっていたのは真田昌幸や黒田官兵衛だけではなかったはずです。

伊吹山麓の伝承

大阪城には豊臣秀頼が健在です。三成たち主だった西軍の諸将は、秀頼のもとでの再起を目指したと思われるかもしれません。三成が古橋で捕縛されたのは九月二日。再起をかけた六日間を、伝承をつなげて追います。

戦場を離脱した三成は、背後の伊吹山中に逃れ、春日谷から新穂峠を越えて甲津原(米原市)で姉川に出て、草野谷を横切り、宇喜多秀家も小西行長も同じように伊吹山中に活路を求めています。伊吹山中のルートは不明です。

田附氏はひとつの説を提唱されまし

た。西軍の後方には黄母衣衆という騎馬隊が控えていたとする絵図や資料があるようです。三成は、戦の帰趨が定まるといち早くこの騎馬隊で、北国脇往還を北上したというのです。つねに計画高い三成のこと、万が一の敗戦にも備えていました。これを裏付けるような伝承が街道筋の宿場町・春照(米原市)にのこります(「伊吹町史文(化民俗編)」。三成が本陣で身を休め、いずこかへ去ったと伝えられています。

のちの詮議でこれが発覚した春照は、徳川軍により焼き討ちにあい、本陣の庭石にはその時の火の痕があるそうです。さらに、田附氏は、再起のための目的が、はじめから古橋だったというのです。

(歴史文化財保護課)



▲春照宿